

呉 寧真 提出 学位申請論文

『古代語複合動詞の敬語形の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、古代語の複合動詞の主体敬語（いわゆる尊敬語）の形について考察した論文で、序章「古代語の複合動詞」、第一章「動詞連用形に後接する「おはす・おはします」」、第二章「動詞連用形に後接する「ものす」」、第三章「「見る」型複合動詞の敬語形」、第四章「「召し寄す」の通常語形」、第五章「中古和文複合動詞の主体敬語の形」、第六章「上代語複合動詞の主体敬語の形」、第七章「中世語複合動詞の主体敬語の形」、補章「現代語におけるアンケート調査結果」、終章「結論と今後の課題」の十章から成る。

序章では、研究の背景と目的を述べ、本論文の扱う複合動詞の範囲を示している。古代語の複合動詞が存否も含めて範囲を特定しがたいことに鑑みて、「動詞連用形 + 動詞」の形をとるものを、前項と後項が並列的な関係にある「動詞並列」、統語関係がある「動詞連接」、そのうち助詞が介在せず、前項と後項が入れ替わる例もない「動詞複合」、後項が機能的意味を表す「動詞 + 補助動詞」の四種に分け、前三者を本論文で扱う「複合動詞」であるとする。

第一章と第二章では、動詞連用形に後接した「おはす・おはします・ものす」が複合動詞の後項なのか補助動詞なのかについて考察し、前者

の場合、その通常語形を探っている。まず、前接する動詞が「来・行く・ゐる」を後接するかどうかに着目し、後接した語を通常語形とする。次に、この方法で通常語形が特定できない場合は、特定できた語の特徴を踏まえ、動作主の移動の有無に基づいて想定する。その結果、「おはす・おはします・ものす」は複合動詞の後項と捉えるのが原則で、その通常語形は、動作主の移動がある場合は「来・行く」であり、動作主が動かないでいる場合は「ゐる」であるとする。また、動作の存続を表す場合を補助動詞としている。

第三章では、「見る」を要素とする複合動詞の主体敬語の形について考察している。「見る」が前項になる場合、主に複合動詞全体に「たまふ」をつける型になるのが原則で、前項を「御覧ず」に変える型もあると述べる。一方、「見る」が後項になる場合、「たまふ」をつける型になることを指摘する。

第四章では、敬語独立動詞「召す」と複合動詞「召し寄す」の通常語形について、「呼ぶ」「取る」の複合動詞の調査を通して考察している。「召す」と「呼ぶ」とは対応するが、「取る」とは対応せず、「召す」の持つ「人が介在する」意に対応するのは、「取る」に使役の助動詞「す・さす」を用いた形であるとする。そして、ヒトを呼び寄せる場合の「召し寄す」の通常語形が「呼び寄す」であるのに対して、モノを取り寄せる場合の「召し寄す」の通常語形は「取り寄せさす」であると推定する。また、「召す」の通常語形はヒトを呼ぶ場合が「呼ぶ」であるのに対して、モノを取り寄せる場合は「取り寄す」が担うとする。使役の「す」を用いた「取

らす」ではないのは、「取らす」が使役の意を失った「与える」意を表す動詞となっているためであるとしている。

第五章では、中古和文の複合動詞の主体敬語の形の使用傾向を示し、複数の形が見られる理由を考察している。まず、主体敬語には、Ⅰ「敬語独立動詞＋後項」、Ⅱ「前項＋たまふ＋後項」、Ⅲ「前項＋敬語独立動詞」、Ⅳ「前項＋後項＋たまふ」、Ⅴ「敬語独立動詞＋敬語独立動詞」、Ⅵ「敬語独立動詞＋後項＋たまふ」の六種類があることを示し、ⅠⅢの敬語独立動詞を主に用いる動詞と、Ⅳの「たまふ」を主に用いる動詞に分けられることを指摘し、敬語独立動詞が二種類以上ある動詞は敬語独立動詞を使う傾向があり、そうでない動詞は「たまふ」を使う傾向があることを示す。そして、この傾向は二段階の敬語の形が必要であることの反映であると解釈している。また、ⅤⅥの両項敬語形が生産性のある形ではないことから、中古の複合動詞が、複合する力が強くなりつつある段階にあるとしている。

第六章では、上代語の複合動詞の主体敬語の形について考察している。上代には中古で見られない両項敬語形「動詞＋たまひ＋動詞＋たまふ」が見られるが、宣命における特殊な形であることを指摘する。また、上代語の複合動詞の主体敬語の形は、接尾語「す」を一回用いる形が一般的であるとする。

第七章では、中世語を中世前期と中世後期に分け、複合動詞の主体敬語の形について考察している。中世前期では、二種類の敬語独立動詞を有する動詞は、より敬意が高い敬語独立動詞を用いる形と、一般的な敬

語独立動詞を用いる形で敬意差を表し、一種類の敬語独立動詞しか有さない動詞は、「敬語独立動詞 + 後項」に更に尊敬の助動詞を後接させる形と、「敬語独立動詞 + 後項」や「前項 + 後項 + る・らる」の形で敬意差を表しているとする。中世後期では、二種類の敬語独立動詞を用いる複合動詞がなく、一種類の敬語独立動詞しか有さない動詞は、「敬語独立動詞 + 後項 + る・らる」「前項 + 後項 + (さ) せらる」と、「敬語独立動詞 + 後項」「前項 + 後項 + る・らる」の形で敬意差を表すとする。なお、複合動詞の例数は多いが、敬語形の例数が少ないことから、複合動詞を敬語形にしなくなっていることを指摘している。

補章では、現代語の複合動詞が敬語形になる場合、どのような形を用いるか、また、語彙的複合動詞と統語的複合動詞による使い分けがあるかどうかについて、日本語母語話者と日本語学習者に分けて、アンケート調査を行い、現代語の実態を探っている。現代語の複合動詞の敬語形は、語彙的複合動詞を敬語形にする場合には、「お + 前項 + 後項 + になる」の形、統語的複合動詞を敬語形にする場合には、「お + 前項 + になり + 後項」の形になることが指摘されている。調査の結果、母語話者は、複合動詞を敬語形にする場合、語彙的複合動詞と統語的複合動詞による使い分けがあるが、個人差があるとする。一方、学習者は、複合動詞を敬語形にする場合、語彙的複合動詞と統語的複合動詞による使い分けはほとんどなく、語彙的複合動詞の敬語形（「お一になる」）を使う場合が多いとする。

終章では、結論として各章のまとめと、今後の課題について述べている。

論文審査の結果の要旨

申請論文『古代語複合動詞の敬語形の研究』は、古代語の複合動詞が主体敬語になる場合に、どのような形をとるかについて考察したものである。複合動詞の敬語形について、これまで部分的な指摘はあるものの、複合動詞全般について調査・考察を行った研究はなく、この観点を研究対象に選んだ着眼点は評価に値する。

従来、この観点の研究が進まなかった理由は二点ある。一つは、古代語の複合動詞の認定の難しさという点である。現代語の複合動詞に相当する古代語の「動詞 + 動詞」の形には、アクセントが変化したり連濁を起こしたりする例がなく、前項と後項が入れ替わったり、前項と後項の間に助詞が介在したりする例があることから、複合動詞それ自体の存在を否定する見解がある。本論文では、現代語の複合動詞と異なることを踏まえ、動詞が並列した「動詞並列」から、前項と後項が統語的に結びついた「動詞連接」、前項と後項が入れ替わった例もなく、助詞も介在しない「動詞複合」までを連続したものとして扱って考察している。穏当な措置であると言えよう。もう一つは、複合動詞の認定の難しさと相俟って、その全貌が把握しにくいことによる、調査の難しさという点である。本論文では、敬語とその通常語に着目し、近年整備されつつある「日本語歴史コーパス」(国立国語研究所)を効果的に用いて用例収集を行っている。このように、二点の困難な課題を乗り越えることによって、従来の研究を推進した論文であると評価される。

本論文の特筆される成果は、中古語を中心とした古代語の複合動詞の敬語形の使用傾向を示し、それが二段階の敬意差を表すための反映であるとする解釈を示したところにある。使用傾向の調査報告に留まらず、敬語研究と複合動詞研究の観点からも注目される知見を提出している。

まず、使用傾向を示す際に、可能な敬語形を想定して考察を行っている。通常語を主体敬語にするには、専用の敬語独立動詞を用いるか、補助動詞「たまふ」を用いるかの方法があるが、複合動詞の場合は、前項と後項の一方または両方を右の方法で敬語形にする可能性がある。第五章では、実際の使用傾向が、専用の敬語独立動詞を複数持つか否かによって変わることを明らかにしている。例えば、「来」は「おはします」と「おはす」の二種の敬語独立動詞を持ち、「見る」は「御覧ず」の一種の敬語独立動詞を持つが、「来」のように二種以上の敬語独立動詞を持つ語は、「敬語独立動詞 + 後項」と「前項 + 敬語独立動詞」を用いる傾向があり、「見る」のように一種の敬語独立動詞を持つか一種も持たない語は、「前項 + 後項 + たまふ」を用いる傾向があることを示す。次に、この傾向が、二段階の敬意差を表すための反映であるとする解釈を示す。すなわち、二種の敬語独立動詞を持つ語は二種の敬意差によって、一種の敬語独立動詞を持つ語は、それと「たまふ」によって、敬語独立動詞を持たない語は、「(さ) せたまふ」と「たまふ」によって二段階の敬意差を表し、二段階のうち敬意差の低い方の用例が多くなるため、上記の使用傾向になるというのである。

敬意差を表すための形式には、二段階の形式があればよいという点と、

その表し方に規則が認められることを示した点は、敬語研究のうえで有効な指摘であり、大いに評価される。また、前項と後項をともに敬語にする両項敬語形が生産的な形ではないことを指摘している。前項と後項がそれぞれ自立的な語であるなら、両項敬語形を用いてもよさそうである。複合動詞の存在を否定する場合、両項敬語形が希である理由を答える必要が生じるだろう。本論文の成果は、古代語の複合動詞の研究にも資するところがある。

第五章が中古語の総論として位置づけられるのに対して、第一章から第四章は各論として位置づけられる。敬意差の指摘の他、「おはす・おはします」の通常語形が「来」「行く」「あり」「ゐる」であること（第一章）、「ものす」が複合動詞後項として働く場合は「来」「行く」「ゐる」の意であり、補助動詞として働く場合が少ないこと（第二章）、「召し寄せさす」の通常語形が「呼ぶ」場合は「呼び寄せさす」、「取る」場合は「取り寄せさす」であること（第四章）など、随所に古典解釈に資する有益な指摘が見られる。また、中古語との差異に着目して、通時的に、上代語（第六章）、中世語（第七章）、現代語（補章）の実態を考察している。とりわけ注目されるのは、上代語における両項敬語形「動詞 + たまひ + 動詞 + たまふ」が、宣命で用いられる形式であることを示した点であり、萬葉集に見られる例も、宣命的な表現を多用した歌の中で用いられていることを指摘した点である。敬語の形が文体を測る指標になることを示した点は非常に興味深い。

上に挙げた本論文の成果は、評価されるものであるが、次のような問

題もある。まず、「通常語形」の指すところに曖昧な点があり、用語の精確な規定が求められる。また、中世語と現代語の複合動詞が敬語形を作りにくくなっているという指摘を確かなものとするためには、本論文で扱わなかった近世語の調査を踏まえた詳しい調査と考察が必要である。さらに、複合動詞の客体敬語（いわゆる謙讓語）の形についても、使用傾向の調査と考察が期待される。このような問題が残るものの、これらは今後研究を進めていくことで克服されるものと考えられる。

以上により、本論文の提出者吳寧真は博士（文学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和元年12月19日

主査	國學院大學教授	吉田永弘	㊞
副査	國學院大學教授	小田勝	㊞
副査	國學院大學名譽教授	大久保一男	㊞
副査	聖心女子大学教授 國學院大學大学院兼任講師	小柳智一	㊞

呉 寧真 学力確認の結果の要旨

下記4名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和元年12月19日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	吉田永弘	㊞
副査	國學院大學教授	小田勝	㊞
副査	國學院大學名誉教授	大久保一男	㊞
副査	聖心女子大学教授 國學院大學大学院兼任講師	小柳智一	㊞